
Dear ディー・ノさん

零崎稻織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear ディーノさん

【NZコード】

N9178C

【作者名】

零崎稻織

【あらすじ】

私はディーノさんの彼女。付き合っていはるはずなのに、2人きりの時間はない。ディーノさんはカッコよくて、優しくて……私には申し分のない彼氏。でも……。

(前書き)

「ディーノさんに彼女ができたら（いたら）こんな感じかな?」と考え、執筆致しました。ディーノさんファンの方が読まれても差し支えないかと思われます。

私たちに2人きりの時間はない。

ディーノさんは大勢の部下を抱えるキャバツローネファミリーのボス。当然忙しいし、師匠と弟分のいるという日本に頻繁に出掛ける。ペットのエンツイオくらい任せてくれたつていいじゃない（あ、一応エンツイオは武器だった……）。私なんて、いてもいなくても同じようなもの。もつと私を必要としてよ！

ドライブするときだって、隣には座れない。私にとつて特等席である助手席は、ロマーリオさんの指定席だから。ロマーリオさんは最も信頼のおける部下の1人で、なぜか私たちのデートについてくる。わからないようにしているけど、余裕でバレている。マフィアのボスの彼女だもん、それくらいわかる。

「部下と私、どっちが大事なのよ？」

ディーノさんは本当にカッコイイ。顔だけじゃなくて優しいし、私には申し分のない彼氏。でも……。

「それは……」

「何を迷ってるの？」

ディーノさんは私のことも部下のことも大切に思ってくれている。どっちが大事かなんて決められないんだ。今は嘘でも私の方が大事だつて言うべきだけど、それができない。そういう優しい人だから。

「答えなくてもいいよ。私たち、距離を置かない？」

「え？」

「私はあなたのことが好き。だけどあなたには使命がある。ファミリーのボス、リボーンさんの弟子、そしてボンゴレー0代目の兄貴分としての。だから」

ディーノさんは何か言おうとしていたけど、私はそれを遮った。

「何も言わないで。気づいてるんでしょ？ 何が一番大切なのが。そ

れに私、デーーートに部下がついてくるなんてウンザリなの」「き、気づいてたのか？」

「そりゃあ、マフィアのボスの彼女ですから」

「……今まで悪かったな」

「もういいわよ。全然気にしてないから。エンツィオがキッチンを壊したことなんて」

「気にしてるじゃないか……」

「じゃあ、行くね？」

有無を言わせず、私はかけだした。

ディーーーさんは流れた涙に気づいてくれたかしら。私だって、別れたくないなかつた。距離を置くという中世半端な言い回しを使つたけれど、彼もわかつてゐるはず。私たちがもう終わりだつてこと。

私はディーーーさんが好き。

だから彼には幸せになつてもらいたい。そのためには、私は彼の側にいてはいけない。気づきたくなかったけど、気づいてしまつた。気づかないふりをしていたのかもしれないけど。彼は優しいから、自分から別れを切り出すなんてこと、きっとできない。だから甘えてた。もともと、押しかけ女房みたいなものだつたし（同棲してたわけじゃないから安心してね？）。付き合つてたなんて、勝手な思い込みだよね？ いい迷惑だよ。それでも彼は私を大切に思つてくれていた。女の子としてじゃなく、妹みたいな感じだつたと思つけど。かわいがつてくれていたつてこと。

エンツィオにキッチンを壊されたことは、まだちょっと根にもつてゐる。修理代は全額支払つてもらつたけれど、のために一生懸命作つた料理が全部ダメになつちゃつたから。お金じや買えないものだつたから。

ロマーリオさんによると、私と別れた後のティーノさんは相当落ち込んでいたらしい（ちょっと嬉しいかも）。女心なんて全然理解できない人だと思っていたけど、私の意図もわかつてくれたみたい。どうしてロマーリオさんがそこまで知っているのか謎だけど。いつそ、ロマーリオさんとくつついちゃえぱって思う。もちろん、冗談だけど。

ティーノさんあなたには一生彼女なんてできないかもしれないね。できてもすぐに振られちゃうよ。私がその人を呪うから（笑）部下がいない時あなたが弱いということを、最近知ったよ。やっぱり彼女失格だね。ヘタrenaあなたも見てみたかったな。ねえ、そんなに部下が好き？ きっといつか、部下がいなくとも大丈夫になる時が来るよ。それはまだまだ先のことかもしれないね。だけどその時、また会えたらしいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9178c/>

Dear ディーノさん

2010年10月9日18時18分発行